

盛り場空間の変遷とその要因について*

Thoughts for the factors that transform night entertainment areas *

大矢正樹**

By Masaki Oya**

はじめに

少子化に伴い人口減少化時代を迎えたわが国では、都市の側からは、「交流人口の増加」、「集客都市化」が求められている。「集客都市化」を図る有力な手段として都市観光があるが、そこでは「買い物」「食」「エンターテインメント」等の盛り場の要素が、集客増加や客単価向上の面で重要であることが理解されるようになってきている。地方都市の観光振興を考える際には、「盛り場振興」「盛り場再生」も重要な検討課題の一つということができよう。既存の盛り場の成立要因や変遷過程の検討は、今後の都市観光の振興や盛り場再生を図る上で有益と考えられる。

盛り場は時代とともに変貌をとげてきた。本稿では盛り場変遷の要因とは何か、世代交代を盛り場変遷の動因と理解することがどの程度可能か検討する。

1. 盛り場空間の構成要素

盛り場のイメージは人によって様々であるが、デパート・ブランド店等からなるショッピング空間（ハレの空間）、飲み屋・ゲームセンター等からなる歓楽街（ケの空間）、その周縁域という3層構造で考えるのが一般的のようである（図 1.1）^{1),2)}。

北村は、ハレの空間は女性中心の街、ケの空間は男



図 2.1 駅周辺の盛り場の三層構造（イメージ図）

*キーワード：観光・余暇、盛り場

**正員、株式会社環境創造

（京都市中京区新町通四条上ル小結棚町428 新町アイエスビル、TEL:075-254-8811、E-mail:oya@issr-kyoto.or.jp）

性中心の街であるが、近年の女性の社会進出に伴い「ケの空間にコジヤレたハレの空間が進出」しつづると、近年の盛り場変遷の大きな要因についてふれている²⁾。本稿では、3層構造全体を「広義の盛り場」、「ケの空間」及び周縁域を「狭義の盛り場」と定義して、この狭義の盛り場空間の変遷要因についてみていくこととしたい。以後盛り場とはこの「狭義の盛り場」をさすものとするが、周縁域は盛り場とは変遷要因を異にすると考えられるので本稿では言及しない³⁾。

2. 盛り場空間の変遷要因

試みに盛り場を需要と供給の枠組みで考えてみよう。供給サイドから提供されるのは施設とそれに伴うサービスであり、需要サイドは所得制約と時間制約の下で、自己の効用を最大化するようにそれを消費するとみてよいであろう。仕事が終わった後急に飲み会が決まったサラリーマンは、帰宅時刻を考えるとどこの盛り場が良いか、金とサービスのバランスからどの店をまわるのが良いか等々を、すばやく計算して決めるのが常である。

ここから盛り場空間の変遷要因としては以下をあげることができよう。

新たな施設・サービスの出現（供給側の要因）

価値観/時代感覚（効用に係る要因）

盛り場での消費可能額（所得制約に係る要因）

盛り場のアクセス条件（時間制約に係る要因）

の新たな施設・サービスの出現そのものが「価値観/時代感覚」の変化をもたらす場合も多い。1997年から続いたデフレ不況により盛り場は大きなダメージを受けたが、これは反面の所得制約の重要性を示しているとみることができる。

さらに盛り場がハレの空間に依存することから

隣接するハレ空間の動向

も忘れてはならないであろう。地方都市の場合は、中心市街地の空洞化がそのまま盛り場の衰退に結びつく場合が多い。岐阜市柳ヶ瀬はその好例と言える。

3. 盛り場空間はいかに変わってきたか

(1) 法善寺横町の変遷

はじめに事例から盛り場の変遷をみることにしよう。「月の法善寺横町」という歌で全国的にも有名な法善寺横町は、大阪ミナミの道頓堀堀川のすぐ南に位置し、江戸時代から続く歴史を有している。近藤によれば、法善寺横町は大小約60店の飲食店からなる「元祖・隠れ家」的な盛り場であり、1960年代以降の法善寺横町の変遷は表 3.1のようにまとめることができる⁴⁾。

表をみてすぐに気づくのは、法善寺横町のように小さな盛り場でも、社会の動向を反映させながら変貌をとげてきたということである。60年代末から70年代にかけて、マンモスバーやパブ・スナックが出現すると法善寺横町でもスタンドバーからスナックに転換する店がでてくるし、80年代後半から居酒屋チェーンが台頭してくると、法善寺横町でも居酒屋が数件できるようになる。また90年代に酒よりも食にウェイトを置いた店が増加したのも、盛り場にくる女性が増加したためと考えてよい。

表 3.1 法善寺横町の推移と社会の動向

	法善寺横町	社会・娯楽
1960年代	・バー、スタンド25軒(68地図) ・大きな料亭跡地は分割されてバーに。 ・小さなバー、小料理屋が主	・所得倍増計画/高度経済成長始まる(1960). ・スタンドバー全国に普及(トリスバー-58年1183軒62年2409軒)
1970年代	・スナック7軒、パブ2軒('81地図) ・スタンドからスナックに転換する店もでる。	・オイルショック(1973)/高度経済成長終る。 ・マンモスバー、パブ、スナック出現/ポトルキープ普及
1980年代	・'82石畳復活	・東京ディスコラット(1983)、カラオケボックス出現(1986)、 ・若者、女性が飲み屋街の主役に、居酒屋チェーン台頭
1990年代	・大型チェーンを含む居酒屋風の店数件('98現在) ・酒よりも食にウェイトを置いた店増加	・バブル崩壊('90-'91)、デフレ不況('97-),IT・ケータイ普及 ・カラオケボックス急増('96) ・'90年代後半より社用族減少
現在	・02.9.9旧中座解体工事中のガス爆発で被災するも復興 ・「元祖隠れ家」の魅力は健在	・都市再生特別措置法(02.6)、大都市都心回帰傾向 ・地方都市の中心市街地空間化傾向は変わらず

近藤直久「法善寺横町～伝統を取り戻した昔ながらの盛り場」、サントリー不易流行研究所「変わる盛り場」学芸出版、1999、pp20-29、を参考に作成。



図 3.1 現在の法善寺横町(2005年6月撮影)

(2) 盛り場空間はいかに変わってきたか

全国的な視野から盛り場空間がいかに変わってきたか概観してみよう(表 3.2)。

敗戦直後の1945年10月、警視庁は待合、バーなどの営業を許可、これにより盛り場が正式に復活することとなった。福富によれば、「戦後日本の社交場はダンスホールから」始まった⁵⁾。平和の訪れを人々は社交ダンスに興じることで実感したといつてよい。1946年は社交ダンスブームの年となった。またこの年から東京をはじめ各都市で大規模キャバレーが続々と開店、以後キャバレー時代が続くことになる。キャバレーでの商談は日常化し、51年には「社用族」という新語まで誕生した。以後盛り場がビジネスの場としても機能することによって、盛り場の売上げの過半が「交際費」によってまかなわれることとなった。

キャバレーが社用兼用の場であったのに対し、55年前後に誕生したトリスバーをはじめとするスタンドバーはサラリーマンの息抜きのものであり、料金も安くまたたくまに全国を席卷することとなった。キャバレ

表 3.2 盛り場空間の変遷

	盛り場関連	社会・娯楽
戦後	・待合、バー、キャバレー復活'45 ・社交ダンスブーム'46 ・東京の社交場でクリスマスパーティ盛んとなる'47 ・大都市にビヤホール復活'49 ・盛り場に靴磨き少年や花売り少女激増'49	・太平洋戦争終結'45 ・食料不足深刻'45-'46 ・プロ野球公式戦復活'46 ・美空ひばりデビュー'48
1950	・「社用族」という新語誕生'51 ・アルサロがブームに'54 ・厚生省「売春白書」で全国の公娼50万人と発表'55 ・トリスバー'55前後に誕生、スタンドバー全国に普及 ・売春防止法施行'58	・朝鮮戦争勃発'50 ・サンフランシスコ講和条約'51 ・連続ラジオドラマ「君の名は」が始まり大人気となる'52 ・テレビ放送始まる'53 ・「もはや「戦後」ではない」が流行語となる'56
1960	・Xマス、家庭型へ移行傾向 ・キャバレー業界、「ホステス」へ用語統一マスコミに要望 ・風営法一部改正、ソープは許可区域のみで営業'66 ・ピンサロ登場'68	・所得倍増計画/高度経済成長始まる'60 ・「女子学生亡国論」論争'61 ・東京オリンピック'64 ・カラーテレビ、クーラー、カーの3Cが新三種の神器に'66 ・学生紛争'68-'69
1970	・マンモスバー、パブ、スナック出現'70頃 ・ネオン街に不況の風'74 ・クラリオンがカラオケを発売全国に普及'76 ・スナック等でカラオケ大流行 ・「バー・ゲームがブームに	・大阪万博'70 ・マクドナルド1号店オープン ・オイルショック'73 ・高度経済成長終焉 ・原宿に「竹の子族」'78 ・山口組田岡組長狙撃'78 ・ウォークマン発売'79
1980	・「ノーパン喫茶」流行'81 ・若い女性客を主流とした感覚のカフェ流行し始める ・居酒屋チェーン台頭'83頃 ・キャバクラ登場'85頃 ・カラオケボックス急増'86-'96 ・ニュー風俗店増加'85- ・若者、女性が飲み屋街の主役に'80年代	・校内暴力急増'80 ・山口百恵引退'80 ・東京ディスコラット'83 ・「おしん」ブーム'83 ・「金曜日の妻達へ」ヒット'83 ・レンタルビデオ店急増'84 ・ファミコン年間350万台'84 ・80年代ロードサイドビジネス隆盛にバブル景気始まる ・昭和天皇崩御、ひばり死去
1990	・「おやじギャル」流行語に'90 ・「援助交際」増加'90年代初 ・官官接待自粛の影響で盛り場不況'95頃 ・社用族減少'95頃から ・デフレ不況の影響で盛り場の高級クラブ減少'90年代末	・バブル崩壊'90-'91 ・細川政権誕生'93 ・阪神大震災、地下鉄サリン事件'95 ・ウィンドウズ'95発売'95 ・インターネット普及始まる'95頃 ・携帯電話普及し始める'95- ・金融不安、デフレ不況'97-'04

(出典)文献5)の巻末年表に加筆して作成した。

レーとスタンドバー、それに昔ながらの居酒屋、雀荘、パチンコ屋等々が盛り場の構成要素であった。1958年4月には売春防止法が施行されたが、これは当初健全な個室浴場だったソーブランドの売春化の遠因ともなった。60年の池田内閣の「所得倍增政策」を契機に日本は高度経済成長期に突入し、敗戦の痛手を完全に克服した。

敗戦後私鉄各社は増加する需要への対応に追われていたが、64年の東京オリンピック前後からターミナル駅周辺の再開発に着手し、70年代初めには現在の都市における盛り場の構造がほぼ概成されていった。ターミナル駅周辺に、デパート、ショッピングセンター、ホテル、劇場等々が改築・整備されることにより現在のような形態の繁華街が形成され、さらにその周辺にパチンコ店、ゲームセンター、居酒屋、小料理屋、スナック等々が林立する盛り場やフーズク街が形成されていった。図 2.1 に示した盛り場の三層構造は、ここに歴史的根拠を有していると言える。

70年代初めにはマンモスバーやパブ・スナックが出現し、スタンドバーはその姿を消していった。76年に登場したカラオケは、スナック、バー等で大流行し、キャバレーの生バンドの仕事をうばっていった。78年京都三条のキャバレーベラミで起きた山口組田岡組長狙撃の銃声は、キャバレー時代の終焉を告げる弔鐘でもあった。

80年代の衝撃

80年代は現代につながる様々な事象が連続しておきた時代であった。80年をさかいとして歴史が変わったのではないかと思えるほどである。

80年代に入るとモータリゼーションの影響が誰の目にも明らかになった。ロードサイドビジネスが隆盛しはじめ、それにつれて地方都市中心部の商店街が疲弊し、中心市街地の空洞化が進行しはじめていく。娯楽面では83年4月に東京ディズニーランドがオープン、また9月には任天堂のファミリーコンピュータが発売となった。

80年代は若者と女性が盛り場の主役となった時代である。居酒屋チェーンが台頭し、女性をターゲットとした新感覚のバーも出現した。今までは男しか入らないような牛丼、焼き鳥や等に入出入りする女性もあらわれ「おやじギャル」と呼ばれるようになった。86年に登場したカラオケボックスの台頭には目覚ましいものがあり、売上額でゲームセンターと肩を並べるまでに成長した。

意識面での変化もまた著しかった。81年の「ノーパン喫茶」ブームは、「時給がよければパンツを脱ぐのも平気」という若い女性がいかに多いかという事実を明らかにし、大人たちは驚かされることとなった。

83年には「おしん」がブームとなると同時に「金曜日の妻達へ」がヒットし、「キンツマ」が流行語となった。貧しさに耐えながらげんげにがんばる少女の物語と、多摩ニュータウンという郊外住宅地で展開する3組の家族の不倫物語が同時にヒットしたわけである。視聴者と等身大のフツの妻達の不倫が視聴者の共感を集めた事実は特記されてよい。国民は戦前・戦中の暗い時代から戦後の高度経済成長期にかけての日本を回顧しながら、「一億総中流社会」を謳歌しているようでもあった。80年代前半には既に、現在につながる意識の変化がおきはじめていたのである。

デフレ不況と女性が盛り場を変えた

90年代はバブル崩壊とともに始まり、景気の本格的回復をみないまま97年からデフレ不況に突入した。95年の「官官接待問題」やデフレ不況を契機とした接待禁止は、料亭、高級クラブ・ラウンジを直撃し閉店する店も少なくなかった。その後には「ワンランク上の」居酒屋が入ることによって、祇園、北新地といった関西の有名な盛り場もその様態を変えつつある。

90年代の盛り場に最も大きな影響を与えたのは女性が男性同様に盛り場を利用するようになったことである。大阪の女性は東京に比べると「男性の行く居酒屋みたいな所」に行く傾向が強いが⁷⁾、女性をターゲットにした店が増加し、大阪ミナミの南堀江、南船場のように新しい盛り場形成の動因ともなっている。なお南堀江や南船場は新しい施設が客を呼び込む事例の一つであることを付言しておきたい。今後も盛り場を考える上で女性がキーワードの一つになることは間違いない。

4. 盛り場の世代構成と価値観

価値観や意識面の変化が盛り場に大きな影響を与えることは先述したが、世代によって価値観や消費性向に大きな差があることはよく知られている。それが盛り場の変遷にも表われているかどうか見てみることにする。

キャバレー衰退の要因

福富によれば、キャバレー衰退の原因は戦後の男女共学制にある。戦前は小学校から男女を分けて教育したため、男にとって女性は神秘的な存在だった。だからキャバレーは繁盛した。ところが男女共学の教育を受けると女性は神秘的な存在ではなくなる。高いお金を払ってキャバレーへ行く必要もない。このためキャバレーは1965年以降どんどん衰微していったそうである⁸⁾。これは価値観が世代によって異なり、それが盛り場にも大きな影響を与えることを示している。

試みに盛り場に行く世代は20歳代～50歳代と仮定し

て、1950年代以降の盛り場の世代構成を示したのが表4.1である。ハッチの部分は戦後の男女共学世代を示している。50年代は真白であったものが、80年代はほとんどがハッチで塗りつぶされているのがみてとれる。80年代の盛り場は女性に対する神秘感を持たない者が大半を占めており、福富の言葉が正しければ、キャバレーが衰亡したのも無理はないと思われる。

表 4.1 盛り場の世代構成

	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
	戦前生まれ中心	65年以降団塊の世代20代となる	ニューファミリー(団塊世代の家庭像)	新人類登場	団塊Jr登場	
20歳代	30年代生まれ	40年代生まれ	50年代生まれ	60年代生まれ	70年代生まれ	80年代生まれ
30歳代	20年代生まれ	30年代生まれ	40年代生まれ	50年代生まれ	60年代生まれ	70年代生まれ
40歳代	10年代生まれ	20年代生まれ	30年代生まれ	40年代生まれ	50年代生まれ	60年代生まれ
50歳代	1900 #	10年代生まれ	20年代生まれ	30年代生まれ	40年代生まれ	50年代生まれ

は戦後の男女共学世代を示す。

おわりに～まとめと今後の課題～

地方都市における観光振興の一方策としての「盛り場振興」「盛り場再生」を最終目標として、盛り場変遷の要因とは何かについて検討した。観光客の8割を日帰り客が占めるような地方都市では、平均観光消費額が少なくなるので、盛り場の再生は滞在時間の増加とそれに伴う平均観光消費額の増加が見込めるからである。

盛り場の変遷過程をみることから、盛り場空間の変遷要因は、

- 新たな施設・サービスの出現（供給側の要因）
- 価値観/時代感覚（効用に係る要因）
- 盛り場での消費可能額（所得制約に係る要因）
- 盛り場のアクセス条件（時間制約に係る要因）

であることが確認できた。90年代以降盛り場を利用する女性が増加したことは、で女性の価値観が従来とは大きく変わってきたためと理解することができる。

世代構成の変化から盛り場の変化を理解する試みも直感的には面白そうであるが、それで価値観の変化が説明できるかどうか、マーケティングにおける世代論の手法が有効かどうかも含めて検討が必要である。

女性の社会進出を背景に、スーパー、デパート等で

も閉店時間が延長され、アフター・ファイブの活動時間は飛躍的に増加するようになった。「昼」にだけ目を向けた都市・交通計画論では人々の活動領域の全てをカバーすることはできず、アフター・ファイブにも目を向けた認識論や計画論が求められており、盛り場の研究もその一貫と位置付けることができる。

米国のUED(Urban Entertainment destination)の事例をみても、まだまだ経験(事例)と直感(アート)に頼っている部分が大きいように思われる。

本稿は総じて直感的であり、検討の下準備のためのメモに止まっており、今後検討を深めていきたい。

参考文献・補注

- 1) 松沢光雄『繁華街を歩く 繁華街の構造分析と特性研究 東京編』, 総合ユニコム, 1986
- 2) 北村隆一『鉄道でまちづくり』, 学芸出版, 2004
- 3) 大矢正樹: 携帯電話と盛り場空間に関する一考察, 土木計画学研究・講演集29, CD-ROM, 2004 中の「みえないフーズク化」参照.
- 4) 近藤直久「法善寺横町～伝統を取り戻した昔ながらの盛り場」, サントリー不易流行研究所『変わる盛り場』学芸出版, 1999, pp20-29 を参考にした.
- 5) 福富太郎『昭和キャバレー秘史』文藝春秋, 2004
- 6) 前掲書 pp265-266
- 7) 永山太一: 東京の最先端 洋風立ち飲み, 2003, <http://osaka.yomiuri.co.jp/kamigata/2003/030813.htm>